

**<米国研究製薬工業協会(PhRMA)と千葉大学が共催>  
“飛躍するトランスレーショナルリサーチ”をテーマに  
『第2回ヤング・サイエンティスト・シンポジウム』を開催  
～若手研究者の成長と、産官学の連携を目指して～**

日時:2015年1月24日(土) 14:00~19:00

会場:フクラシア東京ステーション

主催:国立大学法人千葉大学・米国研究製薬工業協会(PhRMA)共催

後援:独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)、日本製薬工業協会(JPMA)、欧州製薬団体連合会(EFPIA)、厚生労働省、文部科学省

PhRMAは千葉大学との共催により、去る2015年1月24日、東京・大手町のフクラシア東京ステーションにおいて、ライフサイエンスにおける若手基礎研究者を対象に、「第2回ヤング・サイエンティスト・シンポジウム」と題した研究会を開催しました。

同シンポジウムは、PhRMAが2013年に発表した、基礎研究に携わる日本人の若手研究者を対象とした人材育成支援プログラム『ヤング・サイエンティスト・プログラム』の一環として実施しているもので、創薬分野で若手研究者が果たすべき役割の重要性に関して、グローバルな視点から再認識することを研究者たちに促すこと、研究意欲のさらなる向上、創薬分野で世界的に活躍できる人材の育成に繋ぐことを目的としています。

2013年に続き2回目の開催となる今回は、このようなプログラムの目的に沿って、3部構成で行われました。

第1部は、大分大学医学部臨床薬理学講座 教授 上村尚人氏がモデレーターとなり、長く創薬に携わり、豊富な経験と知見を有する、米国および日本の産・官・学それぞれの研究者による基調講演を行いました。

前半は、「米国でのトランスレーショナルリサーチ事例に学ぶ」と題し、米国の産業界から Janssen Research & Development, LLC, Janssen Pharmaceutical Companies of Johnson & Johnson の Ian S Gourley 氏が「Translational medicine for drug development in Immunology -case studies with a focus on collaboration」について講演しました。また、米国の NIH(国立衛生研究所)の研究機関である National Center for Advancing Translational Sciences(NCATS) の Chris Austin 氏が来場はできなかったものの、予め収録されたスライド動画を用いて、「Catalyzing Translational Innovation」と題した講演を行いました。

後半は「日本におけるトランスレーショナルリサーチ事情」をテーマに、行政の立場からは、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構(PMDA) 審査マネジメント部薬事戦略相談課長の小池 恒氏が「PMDAが実施する薬事戦略相談の事業概要とその活用」について講演し、アカデミアの立場からは大阪大学大学院連合小児発達学研究科 健康発達医学寄付講座教授の中神啓徳氏が「新規機能ペプチドの同定から皮膚潰瘍治療薬の開発研究への道程」について講演し、日本医療政策機構エグゼクティブディレクターの宮田俊男氏が「政府の医薬品研究開発推進施策」について講演しました。

第2部では、若手基礎研究者が「今後自分たちが取り組むべきこと」について検討するワークショップと、トランスレーショナルリサーチ経験者が「人材育成のあり方」を討議するパネルディスカッションのグループに分かれて意見交換を行いました。

ワークショップでは、『ヤング・サイエンティスト・プログラム』の一環として公募により選出された日本人若手研究者を2週間米国へ派遣する「マンスフィールド・PhRMA・リサーチ・スカラー・プログラム」参加者がファシリテーターを務め、産・官・学の、様々なバックグラウンドを持ったメンバーが、それぞれの立場からの問題や今後の改善策について話し合いました。

パネルディスカッションでは、千葉大学教授 医学部附属病院臨床試験部長 花岡英紀氏がモデレーターとなり、第1部の4名の講師と上村尚人氏をパネリストに迎え、「トランスレーショナルリサーチに関わる人材をいかに育成するか？」をテーマに議論を展開しました。

第3部の総括では、第2部に引き続き花岡英紀氏がモデレーターとなり、パネルディスカッションの討議内容を全参加者に共有するとともに、6グループに分かれて討議した、ワークショップ各グループの代表者がそれぞれの討議内容を発表しました。ワークショップでの討議内容発表時には、モデレーターからの鋭い指摘に、発表した若手研究者が言葉に詰まるシーンも見られましたが、これを各グループのファシリテーターがサポートするなど、短時間ながらもワークショップにおける白熱した議論を経て、各グループにチームワークが醸成されたことが伺えました。

最後にこの発表を受けて、パネリストの先生方から今後の創薬の未来を担う若手基礎研究者の方々へ、激励の言葉が送られました。

本シンポジウムでは109名の方々が聴講し、参加者からは「こうした自由な意見のやり取りが産官学の連携を深めていくのだと思う」「色々な意見が様々な観点から聞けて為になった」「次回以降もより明確な課題をテーマに設定し、ワークショップによる議論を行うことは意義があると思う」「抱えている悩みは皆同じだということが分かった。今後はどうやって打開するかがポイントであると思う」などのコメントが寄せられました。

## 【シンポジウムの模様】

齋藤 康 氏



上村 尚人 氏



Ian S Gourley 氏



Christopher P. Austin 氏のビデオ講演



小池 恒 氏



中神 啓徳 氏



宮田 俊男 氏



花岡 英紀 氏



<パネルディスカッション>



<ワークショップ>





<総括>



全体の風景

